鉄砲洲神社詩吟　素読論語解説
平成 29 年 10 月 27 日

文京区にある湯島の聖堂は今年で 327 年経ちました。徳川家康が幕府を運営管理するのに、理論的な背景が欲しいということで儒学を官学に定めました。徳川家康が 300 年続けたいと強く思ったかどうかは分かりませんが、江戸幕府を後世に伝えるために学問的な背景をもちたいと考えて「儒学」特に朱子学を官学に定めました。

徳川家康からみれば「君は君足らずとも臣は臣たれ」ということで、お殿様が馬鹿者でも阿保者でも関係ない。血筋さえちゃんとしていれば家は存続させられる。だけれども子種が絶えたらお家は潰すということを始めたので、家康・家光の頃は各地の諸大名をだいぶ潰しました。ちょっとした難癖をつけて潰しました。ある程度、世の中が平穏になってきたと思ったら、血筋が絶えても事前に手を回していれば、養子をもらうことによって繋げられる。お家が大事ということは家康が始めたようなものです。お殿様が暗愚でも家臣はいうことを聞いて、良いお殿様教育をせよということで江戸幕府はもってきたが、どうにもならない君子がいたのなら、若隠居をさせる制度が出てきました。これは町人にも受け継がれています。石田梅岩という人が武士と同じように町人も同じような倫理観を持って生きていかなければならないという「町人道」を作りました。武家は儒学。町人は石田梅岩が石門心学を説いていますが、根っこは同じ論語です。

論語の勉強の仕方は朱子学と陽明学があります。すごく大雑把にいいますと、朱子学はとにかく論語を必死になって読む。読んで読みまくれば何となく分かる。読んでいて分からないのは読み方が足らないから、ひたすら机に向って勉強をしなさいということが、朱子学です。陽明学は読んでも分からない、悟れないという人達が行動を重視し、読んでいても分からないのだから実行をしようという動きです。何か事件が起きたら、すぐ現場に行く。例えば、大きな震災があったら本を読むのではなくて現場に行く。そして状況を体験する。体験することによって良く読み取るという勉強方法があるのではないかということで、朱子学に対抗して陽明学ができました。

江戸幕府は朱子学を根幹に置いたのですが、陽明学は朱子学に対抗する形で出てきて、だんだん武士の中にも広まっていきました。江戸幕府が公に官学である論語を推奨しはじめて湯島聖堂をつくり、これが後の東京大学の基になりました。湯島聖堂が日本全国の総本山になりました。江戸末期にでた佐藤一斎は、今でいう大学の学長のようなポジションで、入門した時に表面的には朱子学を教えるけれど、自分が認めた見込みのある人間には陽明学を教えるということで両方教えるようになりました。佐藤一斎のお弟子さんで有名だったのが竜虎と呼ばれていた山田方谷と佐久間象山です。竜虎と言われていましたけれど山田方谷は一格上でした。夜っぴいて山田方谷と佐久間象山が議論をする。徹夜で議論

をするので他のお弟子さんが佐藤一斎に何とかしてくれと頼むので、そっと一斎が議論を聞いていたら、最初は佐久間象山が攻め立てていて、山田方谷は受けてやり返すことをしているうちに最後は佐久間象山が黙ってしまう。ということで山田方谷に一日の長がある。佐久間象山は攻撃的で攻めるけれど最後は言い負かされてしまう。でも世間からみると竜虎と並び称されています。以前、小泉純一郎さんが田中真紀子さんに「あなたは大臣としての心得が薄いから、佐藤一斎の『住職心得箇条』を読んで勉強しなさい」と言いました。『住職心得箇条』は、今でいうと大臣の心構えみたいなものです。

山田方谷は陽明学派、佐久間象山は朱子学派となっていますが、お弟子さん達は行動をしていました。明治維新の時、官軍と賊軍とに別れましたが、官軍の理論的拠りどころは佐藤一斎でした。賊軍の拠りどころも佐藤一斎でした。理論的支柱は佐藤一斎で、番外の弟子として西郷隆盛がいました。

佐藤一斎の孫娘の士子（ことこ）が教えたのが吉田茂でした。今の麻生さんに佐藤一斎の系譜は繋がっています。あまり佐藤一斎をご存じなかったようなので、少し背景を話したほうが良いと思ったのでお話をいたしましたが、長い話になりました。

漢詩「漫言」の中に「ただ名と利」という部分があります。まともな人物はいないが「名誉欲」と「権力欲・物欲」この大きな関門を乗り越えることができれば、それは素晴らしい人物といえる。私はその人物に成りたいと思っているけれど、少しは成れたかなと匂わせながら「漫言」を作っていると感じます。

論語素読に一言申し上げれば、論語を読む時は現代に置き換えて解釈をするのが良いと思っています。

素読が孔子とお弟子さんとのやり取りをスクリーンで見るように、頭の中にイメージが浮かんでくる読み込みかたが良いと思います。寺小屋で論語を教える時に、そういう読みかたを徹底的にしていたようです。自然と浮かぶ状況のようでした。そういう読みかたをして、そういうものが見えて現代に置き換え解釈をすると学んでいるなと思います。

衛霊公　第十五

【三一】子曰く、君子は道を謀りて食を謀らず。耕すや　餒　其の中に在り。学ぶや禄　其の中に在り。君子は道を憂えて、貧を憂えず。

孔子がいうには、君子を大人物と考えると、一生懸命に学ぼうとして必死に勉強をする人、強烈にその道を我が物としたいと考えて必死になるけれども、人間としての道を得ることによって食べ物を得ようとは思わない。今の時代だと、これで食べていけるか、収入

が図れるか。今は、収入を図れることによって美味しいものを食べる。生きるための職を手中にと考える人が多いけれど、孔子は人間としての道を得たいと強烈に思い、これで出世したい食べるものを得たいなどは考えていない。

「耕すや 餒 其の中在り」は、農業を専門の職として選んで一生懸命に努力をしても飢饉というものはくるから、飢えることは起きる。専門家になっても飢えは生じるものだ。**「学ぶや録そのうちにあり」**は、一生懸命に学び、学問ができると自然と大臣として、または先生としてきてくれないかと頼まれる。良い職、立派な地位に就けるから是非にと頼まれ収入は得られるようになる。学問ができると結果的に食べられるようになる。**「君子は道を憂いて貧を憂えず」**は、君子は人間としての道。なかなか本物に成れない悟れない。悟れないということは悩むけれども、貧乏ということは、ちっとも憂えないし悲しいとは思わないと解釈します。

現代に置き換えてみると、今回は選挙が面白いと思います。**「君主は道を謀りて食を謀らず」**これは安倍さんで例えてみると、安倍さんは政（まつりごと）の道を得たいと図っているけれど、なかなか悟ることができない。悟るべきものを悟れないから人間として素晴らしい食物を得ることもできないと考えてみるとよいでしょう。

政の道を一生懸命努力しているけれど、食べられなくなることは十分あり得ると思います。たまたま今回は野党が馬鹿なことをしたお陰で、一党独裁ではないけれど勝ってしまった。安倍さんが真剣に政の道を学ぼうとすれば、自然に収入は図れるし、道も開けてくるが、真剣に政の道を追求していないがために、だんだん自滅の道を歩むのではないかと見える。

「君主は道を憂いて貧を憂えず」君主は人間として、まともな政治家になるのであれば良いけれど、今の政治家で政治家の道を全うしたいという人達ばかりではない。小池さんが排除の道を言い出したので、今の政治家はバラバラになってしまった。それは貧を憂えてばかりいるから（貧は収入の道が確保できない）、今回の選挙の結果になったのであろうと、この章句をみると良いでしょう。

【三二】子曰く、知　之に及べども、仁　之を守る能わざれば、之を得と雖も必ず之を失う。知　之に及び、仁　能く之を守れども、莊　以て之に涖まざれば、則ち民敬せず。知　之に及び、仁　能く之を守り、莊　以て之に涖めども、之を動かすに礼を以てせざれば、未だ善からざるなり。

孔子がいうには、知識が沢山ある人、地位とかポストで考えると、今の政治家は地位とかポストを得ることができる。小池さんでみた場合、小池さんは先々総理大臣になろうと、総理選に手を挙げたけれど落選した。都知事の道を得て、都知事から総理大臣になろうと

手を打って、都知事選に出て通ってしまった。**「知 之に及べとも」**は、都知事の地位を得るという知恵を働かせて、小泉さん・小沢さん・細川さんなどの知恵をもらい、自分なりの知識を得てポストを得ることができた。**「仁 之を守る能わざれば」**小池さんは素晴らしい、人を思いやる氣持ちがあるねと周りの人が思えば、ポストに持っていけることができ、希望の党代表になったということで守ることができるけれども、排除の論理みたいなものを、ジャーナリストに突かれてつい言ってしまった。あれは誘導尋問に引っ掛かって、ぽろっと言ってしまった。後で本人はパリで言葉を武器にして政界に出た人間が、ぽろっと言ってしまったことは実に反省すべきことだという言い回しをしています。排除という言葉が独り歩きをしてしまったので、ぽろっと言わせたジャーナリストのせいだというのが言下に溢れています。**「之を守る能わざれば」**で、人を思いやるものが見えないので**「之を得と雖も必ず之を失う」**希望の党を作り、都知事にはなったけれども、必ずこれは失う。これはポストから転げ落ちるだろうということです。転げ落ちるようにぽろっと言わせたジャーナリストが今回もぶら下がりで質問をしたら、聞こえないふりをして無視している。これはまたテレビで映し出しますから、小池さんは仁がない、思いやりがない駄目だねとテレビで流れますから怖いです。今のメディアは下手に煽ってどんどん広げます。あっという間に拡散します。孔子の時代とはだいぶ違います。拡散の仕方が激しい。

今の時代でいけば、地位にある人は、慎み深く周りの人に敬意を払って臨まなければ、少しでも驕り高ぶりが見えたら、国民は敬意を払わなくなる。これは安倍さんも同じです。でも安倍さんは上手です。一度、総理職を無くしていますから、かなり反省をしたと思います。

余分なことをいいますと、今の日本は論語でだいぶ固められています。総理大臣と副総理大臣です。安倍さんの祖父・岸伸介は巣鴨に収監されている間、本を一所懸命に読んでいた。渋澤栄一が書いた『論語講話』を読み込んで巣鴨から出所して、『渋澤論語を読む』という上中下巻を世に出しています。その本も読みました。岸伸介も論語にどっぷり浸かった。麻生さんも吉田茂が論語にどっぷり浸かっていた。佐藤一斎の孫娘に仕込まれて現在にきています。ということで**「荘　以て之に涖まざれば、則ち民敬せず」**厳かに慎み深く謙虚に臨めということは、祖父や曾祖父あたりまでいくと安倍さんもやっているのでしょう。麻生さんは吉田茂のやり方が素晴らしいと思って守り続けています。その点で小池さんと比べて一日の長があるとみえます。

「荘　以て之に涖めども、之を動かすに礼を以てせざれば」安倍さんは礼を持って動かしているようにみえるので、辛うじてか細い勝利を得た。小池さんは驕り高ぶりがちょっと出たので、奈落へ転げ落ちるところで引っ掛かって止まった。これは小池さんの力ではなくて、民主党に鞍替えをしてきた政治家たちの力で受かったのだろうと思います。**「未だ善からざるなり」**いまだ小池さんは安倍さんに比べて十分ではないと、今日の論語の部分を現代風に解釈させていただきました。